

「敏さんの詩集より。」

故上田敏博士の詩集をひもぎく。美しい詩ばかりだ。そのうちでエミール、ヴェルハーレンの譯詩に素適なものがある星を讚美する人々に紹介しやう(朧木生)

世 界

世界は星三人より成る

空高く、

ミこしへに無聲なるいつの世より

空高く、

奥深くして風荒るる天上のいつこの庭に

空高く

いづれの太陽を央にして

ものに譬ふれば

火焰の蜂の巢をさながらに

勢力彌漫したる虚空の大壯觀中

幾千萬の不可思議にして壯烈なる

星の巢立は飛散す

(二四)

星ありき、何の世も知らねき、蜜蜂の如く
これら衆星をまき散しぬ

これ、今、金色の精氣の中

花に籬に、園生の上を飛びかひて

夜は輝き晝は隠るる

久遠の天の運行に、

往きつ、離りつ、はた戻りつ、ミこしへに回轉す

母なる星のめぐりを。

嗚呼熾烈なる光明の、狂へる如き大旋轉よ。

白色の大靜寂、これを領す。

うまれの火爐を中心に、狂ひつ、まぎろきつ、

廻轉する金色の天體は、宇宙の則に従ふなり。

嗚呼大法に従ひて、而も無邊なる大群飛よ、

焰の落葉か、燃え上る草むらか、

更に更に遠く進み、更に更に高く跳り、

發生し、死滅し、はた増殖して

輝くもの、燃ゆるもの、

さながら似たり、

寶冠のおもてを飾る珠の光に、

かくて地球も其昔、いつかは知らず在天の

大寶冠より滴りたる夜光の玉のひこひかり。

緩漫にして遲鈍なる寒氣、鉛の色の濕りたる空氣は

この炎々として猛烈なる火氣を靜めて

大洋の水、まづ其面を曇らせ

山岳、つぎに其氷りたる脊柱を擡げ

森林は、底土の下より顫へて、

朱に染みて骨々しき猛獸の怒號、争鬭に戦き

天災、東より西に流れて

大陸は作られ、また滅びぬ

かしこ、旋風の怒をなして渦卷く所

狂瀾怒濤の上、岬はつきいでぬ。

突進し、震盪し、顛覆する天地の苦鬭

漸くにして其狂亂を收むるや

影ぞ争ひの幾千年後

徐ろに人は宇宙の鏡に顯はる。

彼はじめより主たり

忽然として

其上半身を直立し、其額を上げ

萬物の主たりと名乗る、かくて其祖より離れぬ。

晝あり夜あるこの地球は、

はるばるに限なく

東西にひろがり、

はじめの思想の、はじめの飛躍

人間の

至上なる腦の奥より

日の下にあらはれぬ

嗚呼、思想よ、

恐ろしき飛躍なる哉、火焔の散らふに似たり

其争ふや赤く、其の和するや緑に、

天上の星光、雲を破る如く

はてしらぬ原にかがやき

火の如くなりて虚空に轉じ

山を攀ぢ、川を照らし

新光明を隈なく放ちぬ

海より海へ、靜寂の邦の上に。

されどこの金色の喧囂の中

いつも空にある如く、今も空にある如き

大諧音の終に起らむを望みて

さながら

日輪の如く
あらはれ、のほるものは
此世の民の中より出づる
天才なり。

火焔の心を有し、蜜の唇を有して
天才は事も無けに「道」を語りぬ。
苦悶の闇に迷ふ凡百のこもがら
皆この大思想の巢にかへり來て
切なる求道、狂ほしき疑惑の
満干の波はひたせぎも

此突如たる光明に影も停まりつ、
萬の物質に新しき震動は傳り
水も森も山岳も、山風に濱風に、
身の輕きをおほえて、

波自から跳り、枝自から飛びて
白き泉の接吻に岩も動きぬ
萬物其基よりして革りぬ
眞と善と、愛と美と醜と、

大火が作る微妙なる結合は、
宇宙の精神の經緯となりて、

(二六)
愛する物が織りなせる世のすべては
終に天上の則に従つて生く。

世界は星と人により成る。

(上田敏詩集三〇九頁)

ケールスク磁鐵礦發見

中央ロシアのケールスク地方で磁石の針に狂ひを生ぜしめる場所があるといふことは十九世紀の末頃から非常に有名となつてゐた。之れは地中に磁鐵の大塊がかくされてゐからだといふ見込みで、今までに幾度も地面の發掘が行はれたがいつも失敗であつた。しかるに近頃ソヴェエト政府ではレーニンの意志により、ラザロフ、グブキン、アルハンゼルスキの三教授が探險の結果、六ヶ月間苦心の後、遂にチグリ町の附近に其の元礦を發見したといふ。報告によれば、礦脈は地下五〇〇呎乃至八〇〇呎の深さにあつて、百五十哩の長さにわたり連續してゐ、礦石は五〇乃至七五パーセントの鐵を含んでゐるといふ。(一九二三、四、三〇、ヤークース天文臺にて)